

# 『大人のADHD もっとも身近な発達障害』

岩波 明

ちくま新書 8000円

発達障害の中のADHD（注意欠如多動性障害）に焦点を当て、症状はどんなものか、どんな治療があるのかを専門医が解説する。ADHDは従来、子どもの病気だと見られ、成人の発達障害ではアスペルガー症候群が有名だったが、近年はADHDの患者のほうがはるかに多く、成人の約3%にのぼるとされる。

その症状は、過度におしゃべりをする、内的な落ち着きのなさ（多動症状）▽いらいらしがち、衝動的な行動や判断が多い（衝動性症状）

▽注意の持続が困難、先延ばしにする（不注意症状）  
などだが、症状の個人差は大きい。  
そのため、うつ病やASD（自閉症



スペクトラム障害）との混同も多いという。

著者は従来の精神疾患と異なり、むしろ「特質」と言った方がいいと指摘。ADHDの人は「社会の中で輝くことのできるさまざまな『能力』や『素質』を兼ね備えている」「ためらわずに決断し突進を繰り返すのであるが、その過剰な試みは、新しい活路を切り開く契機になる」と説く。社会はどう対応したらいいのか。他人事ではすまされないことを認識させられる。（若林 良）